# 超空想魔法科学大戦

９５式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超空想魔法科学大戦

【Nコード】
N2241S

【作者名】
95式

【あらすじ】
ふっとした思い付きで書き始めた多重クロスオーバー小説です。最初は知り合い数人に見せていただけだったんですが、どうせならと思い、投稿するに至りました。　書くからにはあまり半端な物は書かないつもりですが、　正直最後まで書き上げる事ができるかどうかは未知数です。　万人受けする物が書けるとは到底思ってませんし、そうするつもりもありません。　プロの小説家ではないので、その辺は大目に見てください。(何)　気に入って貰えれば感想なり励ましの言葉なり頂けると幸いです

# **第一話　「その始まりは突然に」**

第一話　「その始まりは突然に」

それは今でも忘れない出来事。
突然やってきた戦い、それと立ち向かった日々。
たくさんの仲間との出会い、そして別れ。
これは、そんな少し変わった出来事の、お話………

リリカルマジカル、始まります。

---

「なのはちゃん、また明日〜」
「バイバイ、なのは〜」
「また明日ね、すずかちゃん、アリサちゃん」
友人の呼びかけに笑顔で手を振って応えた少女は、ごく普通の小学生たち。
しかし、その中の一人、高町なのはは——
栗色の髪をリボンで結んだ、髪と同じ色の瞳を持つ、
一見どこにでもいる普通の小学生に見える彼女は——
——彼女は、『普通の小学生』では無かった。彼女は——そう…『魔法少女』なのである。

半年前、とある事件が起こり、うやむやのうちに魔法少女になった彼女。
事件を通し、成長した彼女は、かけがえのない友人を得て、そして、自身は少しずつ魔法を練習しながら日々を平和に過ごしていた。

――――――――――そう、この瞬間までは。

「……何だろ……あれ」
家路に付く中、なのはは異変に気付いた。
最初は黒い小さな点でしかなかった「それ」が、街に近づきつつあるのを。
「只の飛行機……には見えないよね。アレが何か知ってる？レイジングハート」
<いいえ、データベースには該当はありません。>
周囲の人間もその黒い異様な飛行物体に気付き、何事かと空を見上げどよめいている。

—その時だった。

黒い飛行物体から赤い数条のビームが放たれ、平和な日常が一瞬にして地獄絵図と変わった—
ビームの当たった鉄骨でできた電波塔が当たった部分から上の方が綺麗さっぱり消し飛び、
鉄筋コンクリートの建物がまるで特撮映画でも見ているかのように簡単に倒壊していく。
どこかで火が付いたのだろう。火災もおこっていた。その惨状に悲鳴を上げ逃げ惑う人々。

それを直ぐ近くの町を一望できる公園で見下ろすなのは。

「！！何？！何処かの軍隊さんが攻めて来た…の？」

＜わかりません、しかし、放置すれば街の被害は計り知れない物になりそうです＞

「…おはなしの通じる相手だといいんだけど…行くよ、レイジングハート！」

＜オールライト、マイマスター＞

「レイジングハート、セットアップ！！」

＜スタンバイレディ、セットアップ＞

---

――

一方その頃、海鳴市沖合の海上を飛ぶ、５人の少女達がいた。

彼女たちは一様に足に戦闘機の先端部分に似たものを装備していた。

それは、怪異と戦うために作られた魔女のほうき。

戦闘脚「ストライカーユニット」、それを装備した彼女たちは、「ストライクウィッチ」である。

「なー、少佐ー、そろそろ基地についてもおかしくない、よな？」

そう言ったのはウサギの耳をはやした５人の中で一番の体型の少女、

彼女はシャーロット・Ｅ・イェーガー大尉。

「……ああ。そろそろ基地が見えても良さそうなものだが……」

そう言われて応えた少女は坂本美緒少佐、

黒髪とドーベルマンの耳、そして左目の眼帯が特徴である。

「……坂本さん、どうしたんですか？」
「ねー、基地まだー？私おなかすいたよ〜」
「ルッキーニちゃん、空気読もうよー」

その後ろを飛ぶのはショートボブの髪に豆柴の耳をはやした宮藤芳佳軍曹。
黒髪のツインテールに黒豹の耳のフランチェスカ・ルッキーニ少尉。
太い眉毛と後ろに束ねた髪の少し気の弱そうな感じはするのがリネット・ビショップ曹長である。

「クッ……私としたことが、方角を見失うとは……
太陽の位置もおかしい……ここは……何処なのだ？！」
「し……仕方ないですよ！！坂本さん！！
さっき変な乱気流に巻き込まれちゃんたんですから……」
「坂本少佐の言う通り、あんな位置に太陽があるのはおかしいです！
あれからまだ何分も経ってませんよね？」

リーネの言うとおり、太陽は先程までほぼ南中高度にあったはずである。
それなのに、今は夕方と言っても差し支えない低い位置に太陽があるのだ。

「それはそうだが、だが、たった一つの乱気流で方向を見失うなど
……クソ、私のミスだ……」
「自分攻めてもしょうがないじゃん、少佐。それにこれはどう考えてもおかしいし」
「確かにな。だが、基地に戻れないという事実には変わりない、それに、基地と連絡が取れん」
「げ、マジかよ」

「えーーーーじゃあご飯どーすんのーーーー！！私おなか減ったー！！」

その時である、芳佳が前方を見てあることに気付いた。

「坂本さん……あれ！！」
「街だ〜〜〜！！ご飯だー！！」
「あんな街並み、見たこと無いな……。しかも、ネウロイに襲われてる？！」

そう、５人の目の前にあるのは今まで見たこともない構造物に囲まれた街並みと、
その町を襲うネウロイの姿である。

「……坂本さん、行かないと！！街の人を助けなきゃ！」
「宮藤……そうだな、此処が何処であれ、あそこが何処の街であれ、そこにネウロイに襲われている人間が居るなら、我々のすべき事は１つだ！」
「流石少佐ぁ、よっしゃ、そうと決まれば！！」
「これより我々は、ネウロイに対して攻撃を開始する、各機突撃せよ！」
『了解！！！』

――――

「これ以上、私の街を壊さないで！！」

襲い来るビームをラウンドシールドで防ぎつつ、正体不明の黒い飛

翔体──ネウロイ──に対し呼びかけるなのは。しかし聞く耳持たず、ネウロイはなのはに次々とビームを放ってくる。

「坂本少佐、誰かネウロイと戦っています！」
「何処のウィッチだろ？！ストライカーユニットも付けてないように見えるし…
どうやって飛んでるんだ？」
「と言うか、何か言ってるよ？ネウロイ相手に」

その戦闘を接近しながら確認するウィッチ達。

「もう、いい加減に話を、聞いてってばぁ！！」

堪忍袋の尾が切れたと言わんばかりにディバインバスターをネウロイに放つなのは。
ディバインバスターの光はネウロイの右翼を丸ごと吹き飛ばした。

「な、なんだありゃあ！？」

その光景に思わず目が点になるシャーリー。その横を飛ぶ坂本もその光景に驚愕している。

「魔法力をそのまま打ち出して、ダメージを与えただと？！」
「す、凄いです！！」
「まさに砲撃、並のウィッチにはあんな芸当は到底無理だ……
何者かは知らないが……とにかく援護するぞ！！」
「了解～～～！！ニッキキーン！！」

そう言い一番最初に飛び出しネウロイに攻撃を仕掛けるルッキーニ。

「えっ？！何？！誰なの？」
突然の援軍で驚きの声を上げるなのはに坂本が接近してきた。
「第５０１統合戦闘航空団所属の坂本少佐だ。失礼だが、何処の所属のウィッチだ？」
「ウィッチ……魔導師ですか？ええと所属と言いますか。一応フリーと言いますか、嘱託魔導師の高町なのはです。あなたたちは、時空管理局の人たちですか？」
「時空管理局？何だ、それは？嘱託と言う事は義勇兵なのか？とにかく、ネウロイ撃破に協力してくれるなら助かる」
「『ネウロイ』って言うんですか？あれ。アレの事を知っているんですか？」
「……ネウロイを知らないのか？！まぁいい、私が奴のコアを特定する！！」
コアを破壊すれば、ネウロイは消滅する！！」
坂本は眼帯を外し、ネウロイを観察する。そして、その一点にコアを発見した。
「コアは奴の腹の下だ！！」
「了解！！行くぞルッキーニ！！」
「ヒャホーイ！！」
「援護します！！」
そう言いリーネの援護射撃の元シャーリーとルッキーニがネウロイの腹の下に潜り込み、攻撃を加える。

「よし、コアが見えた！！」

ガッツポーズを取るシャーリー、目の前にはむき出しになったコアが見える。

「よし、トドメは任せろ。喰らえっ！！烈風斬っ！！」

坂本は背中より抜きはなった烈風丸を構え烈風斬を放つ。
しかし、それよりも早くネウロイの皮膜が覆い被さり、コアを防御したため、致命傷を与えることが出来ない。

「くっ……浅いか！！」

苦渋の顔をする坂本。その間にもネウロイのコアがふさがれていく。

「もう一度だ！！いくぞ！！」

そう言い再度突撃する一同だが、そうはさせまいとネウロイもハリネズミのようにビームを乱射し始めた。

「これでは、近づけん！！」
「ああ、コアが塞がれちゃうよ！！どうしよ、どうしよ！！」

そんな中、なのはもビームを防ぎながら反撃の機会をうかがっていた。

「どうしよう。このままじゃ、私たちの街が……」
「あなたの街、なの？」

丁度その横でシールドでネウロイのビームを防いでいた芳佳がなの

はの声に反応した。
「うん、私の生まれ育った街。だから、守りたいの！」
「……そうか、そうなんだ。じゃあ、一緒に、守ろうよ、ええと……」
「なのは、高町なのはです」
「なのはちゃん、か。私は宮藤芳佳。よろしくね、なのはちゃん」
「はい、こちらこそ、でも、どうしよう。こう弾幕貼られると、防いでるだけで手一杯だし……」
＜手は、ありますよ＞
「……うえ！？何今の声！？」
突然聞き覚えのない無機質な声が聞こえ驚き辺りを見回す芳佳。
そんな芳佳になのはが自分の杖を見せて説明する。

「あ、今のはこの子、レイジングハートの声です」
＜初めまして、宮藤芳佳＞
「は、はい、初めまして、てえええええ！？杖が喋ってる！？」
＜驚かれるのはいいのですが、それは後ほどで＞
「あ、ごめんなさい」
「それで、手があるって？」
＜簡単なことです。いいですか……＞

「く、攻撃のチャンスが掴めん！！」
「えーん！！もうつかれたよー！！」
「弱音を吐くなルッキーニ！！ここで退く事はできん！！」

その時である。ネウロイの体の周りを環状魔法陣が張り付いていき、ネウロイを拘束し始めた。
そうすると、ネウロイはまるでそこに固定されたように身動きが取

れなくなってしまった。
「なに！？なんだこれは！！」
「あ、あそこ！！」
リーネが指さした方向には、バスターモードでネウロイに狙いを定めるなのはの姿があった。
それに気付いたネウロイもなのはにに向けビームを集中し始める。
しかし、

「やらせない！！これ以上は！！」

そのビームはその前方で展開された芳佳のシールドに全て弾き返されてしまう。

「レストリクトロック拘束完了。レイジングハート！！」
＜フルチャージ＞
「いくよ！これが私の全力全開！！ディバイィィィィン！バスタァアァァ！！」

そして、放たれる先ほどよりも膨大なエネルギーの魔力の奔流。
ディバインバスターフルチャージが放たれた。
それはそのまま動きを止められたネウロイを中心部をコアごと根こそぎふきとばす。
コアを失ったネウロイは崩壊し白い破片となって霧散するのであった。

「な、な、な、なにあれ！？」
「さっきのとは比べものにならない……」
「相手を拘束し、動けなくした上で問答無用の一撃必殺……うわ、

洒落になんないよ、これ……」
「ああ、魔法力をそのまま攻撃力に変換し打ち出すだけでも驚きだが、
このような拘束魔法まで扱えるとはな……」

　と、一同なのはの能力に驚きを上げていた。

「やったー！なのはちゃんすごーい！！」
「ええと、でも、宮藤さんが守ってくれたからできたんですよ」
「え、えへへ、有難う、あとね？わたしのこと『芳佳』でいいよ？」
「え？」
「だって、私たち、街を守った、仲間同士だもん、ね？なのはちゃん」
「……はい！芳佳さん！！」

「所で芳佳さん、一つ聞いていいですか？」
「ん？なに」
「何で、スクール水着なんですか？それにあの人たちパンツ丸出し……
ズボンとかは穿かないんですか？」
「パンツ……って何だ？ズボンならちゃんと穿いてるじゃないか、ほれ。」
シャーリーは…一般的には『パンツ』と呼称するはずの『それ』の紐をクイクイ引っ張った。

「…………え？」

その後、「ウィッチの下履きはズボンである」という事をなのはに理解してもらうのに一時間ほどかかったのであった。

# 第二話　「幻想郷（ここではないばしょ）」

第二話　「幻想郷（ここではないばしょ）」

嘗て、人は闇を畏れた。
深淵なる夜の暗闇の奥。人里離れた深い森の奥。
険しい山々の連なりの奥。…そんな所に『彼等』は棲んでいた。
しかし、いつしか人はそんな闇を光で照らし始めた。
森羅万象の全ての事象は『科学』と言う名の光で照らしだされ、
森は、山は、切り開かれ…地図からは空白部分が消えていった。

―人は闇を畏れなくなった。
そして、そこに棲んでいた、『彼等』も、いつのまにか『居なくなって』いた。
そこは…そんな私達がいつの間にか忘れ去ってしまった者たちが棲む世界。
そこは…そう、『ここではない場所』……ここは『幻想郷』。

真っ黒な服に、黒い三角帽子…箒に跨った金髪の『普通の』魔法使い、霧雨魔理沙は、
特に何かアテがあるわけでもなく、何となく空を飛んでいた。

「あ〜〜、こうやって空飛んでるだけだと退屈だぜ！！」
「何か面白い事はないかな…っと。霊夢の所にお茶でも飲みにいこうかな？」
そういい終わるか否かの矢先、数条の光弾が魔理沙めがけて飛んできた！
「っっと！！危ないじゃないか、弾幕を撃つ時は一声掛けるもんだ

ぜ？！」
軽やかな機動で光弾を全て避ける魔理沙。
「はぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
ハンマーのような武器を振り回し、なおも魔理沙に襲い掛かる少女。
「おいおい、落ち着けよ、面白い事なら大歓迎だが、暴力沙汰はお断りだぜ？！」
「てぇいっ！！」
ブォン！！ブォン！！
「本気でそんなのでブン殴る気なのかよ…当たったら凄く痛そうに見えるんだけどな…」
「このっ、避けるなっ！！」
「悪いがそいつは聞けない頼みだぜ！！」
一気に加速して距離を取り、反撃体制に入る魔理沙。
「こっちは『普通の』魔法使いなんだ、私の距離でやらせてくれよ。恋符『ノンディレクショナルレーザー』！！」
シュビーッ！！！
「くっ！！」
魔理沙の攻撃をシールドを張って防ぐ少女。
「ありゃ、防いだのか…邪道だな〜。弾幕は普通『防ぐ』モンじゃなくて『避ける』モンだろ？」
「うるさいっ！！そんなの私の自由だろっ！！」
「そう言われるとミもフタもないぜ…じゃあこれならどうなんだぜ？！恋符『マスタースパーク』！！」
シュビ〜〜〜〜〜〜〜ムッ！！
先ほどとは比べ物にならない極太のレーザーが少女を襲う、シールドを張って防ぐが、防ぎきれずに吹き飛ばされる少女！
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
ボロボロになりながらも、何とか体制を立て直す少女。
「私は…負けるわけにはいかないんだっ！！」
「まだやる気なのか？…生憎だけど、それは私だって同じだぜ。」

「グラーフアイゼン、カートリッジロード！！」
＜エクスプロージョン＞
ガキィィン！！
＜ラケーテンモード＞
「ラケーテン！！うぉぉぉぉぉぉぉ！！」
「なぁぁぁっ！！さっきよりも更に痛そうなんだぜ？！」
急加速で突進してくる少女、とハンマーを紙一重でかわす魔理沙！
「危なかったぜ…でもスピードはあっても動きが直線的なら、グレイズするのは簡単だぜ！！」

「そう、ならこんな攻撃ならどうかしら？」
――その声は、突然聞こえてきた。
「な？！」
気が付いた時には、魔理沙の胸から『手』が生えていた。
「…んだ？…こりゃ…」
――魔理沙の意識は、そこで途切れていた……

---

ガッチョン、ガッチョン………
森に重い金属音が響く。
大きな全身鎧を身に纏った大男が、森を歩いていた。
その傍らには少し派手とも思える赤いジャケットを着た金髪金目の少年。
「…ねぇ兄さん、やっぱり、さっきの町まで引き返した方がいいんじゃないかな。」
「…さっきからそうしてるよ、幾ら森の中ったって、

街道沿いに真っ直ぐ進んだんだから、迷う筈ないんだけどな…」
「せめて北がどっちか解ればいいんだけど…兄さん、方位磁石…は、持ってないよね。」
「ああ、持ってない。だから今作る。」
少年が両手を「パン！」と合わせて地面を触ると、文字通り土から方位磁石が「出来上がった」。

そう、二人は物質の構造を、理解し、分解し、再構築する事で、意のままに変化させる事のできる、『錬金術師』なのであった。

少年は「出来たてホヤホヤの」方位磁石を凝視するが、
針はクルクル回るばかりで一向に北を指す事はなかった。
「ありゃ…おかしいな…この辺りの砂鉄の質が悪いのかな。」
「もしかしたら、この辺りの地磁気そのものがおかしいのかもしれないよ、兄さん」
「………う〜〜〜わ〜〜〜〜、『迷いの森』の典型パターンじゃないか、
それ。マズったな。こりゃ野宿確定かな。」
「あっ、あそこに誰かいるよ、兄さん！あの人に聞いてみようよ。」
アルの指差した先には、学生服を着た黒髪でツンツン頭の青年が居た。

『あの〜〜〜、すみません、どう行ったらこの森から出られますか？』
…現れた青年と、見事に台詞がハモった…

「ぐあ〜〜っ！！気が付いたら変な森の中に居て…途方にくれていた俺に、
やっと救いの手が差し伸べられたと思ったのに！…俺と同じ遭難者かよ…不幸だ…」

「どうやら…僕たちと同じ境遇みたいだね、どうしよう兄さん。」
「どうしよう…ったって…見捨てる訳にもいかないだろアル。
…だからといって、この森から出る名案がある訳じゃないけどな。
…ま、ここで知り合ったのも何かの縁だ、俺はエドワード・エルリック、
エドでいいぜ、こっちは弟のアル。」
「アルフォンス・エルリックです、よろしく。」

青年はアルフォンスと名乗った鎧男を指差し
「…………弟？」
それからエドの方を指差し
「……………兄さん？」

「…誰がマメツブだ〜〜〜っ！！」
「いや、まだ何も言ってないし！！」
「言ってるのと同じじゃね〜かっ！！置いてくぞコラ〜〜っ！！」
「悪い！！悪かったっ！！だから置いていくのは勘弁してくれっ！！」
「まぁまぁ、兄さん、いつもの事なんだし・・・」
「…ア〜〜ル〜〜〜〜ッ！！」
プッと青年が吹き足した。
「お前たち、ホント仲良い兄弟だな…いや、ホント悪かった…謝るよ。
…っと、そっちが名乗ったのにこっちが名乗らないままだと失礼だよな、
俺は当麻、上条当麻だ。よろしくな。」

「かみじょー…とーま…さん？珍しい名前ですね、外国から来たんですか？」
「え？！割と日本じゃ普通にある名前…だと思うぜ？！てか、ここ

日本だろ?
どう見たってお前たちの方が外国人だと思うんだけどな。
「ニホン?!…聞いた事のない国だな~~。ここはアメストリス…の筈なんだけどな。」
「アメストリス?それは街の名前か?国の名前か?」
「国の名前だよ…北にドラクマ、南にアエルゴ、西にはクレタ、東には砂漠を挟んでシンがある、本当に知らないのか?」
「…アメストリスどころか、他の地名も、どれもこれも聞いた事の無い物ばっかりだよ…
ったく、また何か厄介な事に巻き込まれたのか、俺は?…不幸だ…」
「お互いがお互いの地名をまったく知らないなんて…どう考えても普通じゃないよ、
どうなってるんだろう、兄さん?!」
「俺に聞くなよ…とにかく、少なくともここは「俺たち全員が知らない場所」なのは確かなんだ、
地元の人捕まえて聞くしかないだろ、アル。」
「そうだね…。」

3人が辿った後が解るように印を付けながら森を散策していると、一人の少女に出会った。
金髪で黒い服を着た、赤い大きなリボンを付けた少女だ。

「今度は地元の人だといいね、兄さん。」
「ねぇ、お嬢ちゃん、俺たち、道に迷ってしまったんだけど、ここが何処か解るかな?」

「そーなのかー、ここは森なのだー」
「いや、どこの森なのかを聞いているんだが・・・じゃ、じゃあお嬢ちゃん、

町か村か・・・とにかく人が居る所を知らないかな？」
「人が居るとこ？！・・・それなら近くに博麗神社があるのだー」
「神社？！・・・神社があるのか？！なら、此処は少なくとも日本の何処かなんだな・・・
じゃあ、悪いけど案内してくれないかな？」
「別に構わないのだー、こっちなのだー」
「よ、良かった・・・一時はどうなる事かと・・・」

少女に先導され、暫く森を進む一行、暫くすると・・・

ぐぎゅるるるる～～～

・・・少女のお腹が鳴った。

「お腹が空いたのだー」
何か瞳を潤ませつつ当麻をみつめる少女。
「な・・・なんですか？！・・・こんな所にもインデックスさんの同類がいやがるんですか？！
・・・ふ、不幸だ・・・」
「ところで―」
「な、なんだよ・・・食いモンなら持ち合わせはないぞ？！」
「――あなたは食べてもいい人類？」
――何だかんだで修羅場を潜っている3人は、その瞬間、少女の雰囲気が変わったのに気が付いた――
直感的に少女から飛びのく3人、数条の光弾が少女から放たれ、3人に襲い掛かる！
「なぁっ？！」
ピシュイン！！
咄嗟に『右手』で少女の攻撃を無効化する当麻！
一方、エドとアルの方も、アルが身体を張って盾になり少女の攻撃

からエドを守っていた。
「大丈夫か、アル！！」
「僕は何ともないよ、それよりも今の見た？兄さん。」
「ああ・・・あんな攻撃は見たこともねー、しかも錬成反応もなし、と来れば・・・・」
「キメラ・・・？！いや、ひょっとしたら・・・ホムンクルス？！・・『あいつら』の仲間かな？！」
「さーな、そんな事は・・・とっちめて直接聞いてみりゃ解る事だ！！」

「どこでもいいから、一口でいいから喰わせるのだー」
ガブッ！！
少女がエドの右腕に噛み付いてきた！！
「・・・どうだ？俺の右腕は美味いか？」
服が破れてエドの右腕が露わになる・・・エドの右手は・・・「鋼の腕」だった。
右腕を振るわせ、少女を払い除けるエド！！

「う〜〜、まずいのだー肉の部分はないのかー」
そう言いながらなおも光弾を放って攻撃してくる少女！
「チッ！！」
エドが両手を「パン！」と合わせて地面を触ると、地面が隆起して即席の『壁』となって攻撃を防いだ。
「お返しだっ！！」
もう一度両手を「パン！」と合わせて「壁」を触ると、今度は壁が無数の石礫となって少女を襲った！！
「あたたたたたっ！！・・・いたいのだー」
「？！・・・魔術・・・なのか？エド、お前って魔術師だったのか？」

「・・・んぁ？！魔術？！・・・ああ〜〜、ま〜、錬金術を見た事が無い人間には、魔法か何かに見えても仕方ないよな、魔法なんてそんな非科学的なモンじゃなくて『錬金術』、れっきとした『科学』だぜ？！、で、俺は『国家錬金術師』」

「・・・言ってる事が良く解らないが、要は魔術サイドじゃなくて科学サイドの人間、って事か？だけど『錬金術』の研究なんて聞いた事がないな、・・・また表沙汰になっちゃマズい研究か何かよ！！」

「・・・あ〜〜〜〜。・・・悪い・・・・お前の放った単語の１つ１つの意味はだいたい理解できるんだけど、全体としては何を言っているのかサッパリ解らない。」

「なかなかてごわいのか〜〜〜？」

そう言っている間にも、少女は次の行動に移った。少女を中心に『闇』が広がる。

まるで真っ黒な墨でも零したような『真っ暗闇』だ。

「ディマケーションなのだー」

スババババババッ！！

『真っ暗闇』の中から無数の光弾が飛び出して来る！！

たまらずエドとアルは錬金術で即席の『壁』を作って、当麻は『右手』で無効化させて防ぐ！！

「そう言うお前の『右手』だって・・・そりゃ一体どーいう仕組みだ？」

「・・・ああ、これは俺の『能力』・・・俺が『右手』で触れた物は、それが何であれ、『異能』の力なら、全てを打ち消す力があるんだ。」

「・・・悪い、俺は『科学者』だからな、もう少し科学的に説明してくれないか？」
「・・・わりぃ、生憎俺はお偉い『科学者先生』じゃなくて只の高校生だからムリ・・・」

スババババッ！！
そう言っている間にも、少女の攻撃は続いている！！

「・・・とりあえず、込み入った話はアレを何とかしてからにしないか？」
「・・・その意見には賛成だな！」
「・・・どうする？真っ黒で本体の位置は特定できないけど、大体の位置が解るなら・・・
錬金術で地面ごとフッ飛ばした方が早いか？」
「あの暗闇もアイツの『能力』なら、俺の『右手』でブッ壊せる、何とか接近できれば・・・」
「・・・とりあえず、俺の錬金術とお前の『右手』があれば、何とかなりそうな気はするな、
いろいろ試して突破口を見つけるか！！」
２人が次の行動に移ろうとした、その時だった！！

「『博麗アミュレット』！！」
シュルルルル、べしっ！！
少女の叫び声があったと思うと、何処からともなく『何か』が飛んで来て、「真っ暗闇」に吸い込まれた。
「モ・・・モガ？！・・・モガ！！・・・モガガガガガガッ？！」
暗闇の中から何やら呻き声が聞こえる、暫くして、暗闇が晴れると、顔面にお札が張り付いてブッ倒れている少女が居た。
「・・・あなたたち３人だけでも何とかなりそうに見えたけど、一応・・・ね、

余計なお世話だったかしら？」
ベリベリベリ。
倒れた少女に近づいて、顔に張り付いた「お札」を剥がす、
何処となく「巫女」をイメージさせるような紅白の服を着ている少女。
「う～～～、くるしかったのだ～～～」
「ルーミア、退治されるのが嫌なら、私の見ている前では人間を襲うのはやめなさい？」
「そーなのかー」

「・・・知り合い？」
「・・・知り合いか知り合いじゃないかと聞かれれば、一応『知り合い』よ？こいつはルーミア、
こう見えても一応妖怪だし、人も喰うから、お腹を空かせている時は近づかない方が賢いわよ？」
「・・・妖怪？！・・・妖怪なんか居るのか？！・・・まぁ、魔術師が居るなら、
妖怪が居てもおかしくはないか・・・でもステイルからはそんな話聞いた事なかったな・・・
今度会ったら問い正してやる・・・」
「えっ？！妖怪なんてそこらじゅう・・・とは言わないけど、結構その辺に居るでしょ、普通。」
「いや、居ないって！！・・・まぁ、とにかく・・・助けてくれて有難う、あんたは？」
「私は霊夢、博麗霊夢。『博麗の巫女』よ。」
「俺は上条当麻、学園都市第７学区に住んでる、只の高校生だよ、
実は道に迷ってさ、ここは何処なんだ？」
「俺はエド、こっちはアル、リゼンブール出身の錬金術師だ、以下同文。」
「学園都市？！リゼンブール？！何処なの、そこ。」

「・・・ゲェッ。」
「・・・またかよ・・・」
「因みにここは・・・博麗神社の近くの森・・・で解る？」
「全然わかんねー、日本で言えば何処に当たるんだ？」
「俺はその『ジンジャ』ってのがそもそも何なのかわかんねー」
そんな2人の様子を見た霊夢は、暫く考えを巡らせると、おもむろに頭を抱えた。
「あなたたち・・・ひょっとして・・・『外の世界』の人間？」
「『外の世界』って・・・何だよそれ、まぁ、宇宙論で言うと理論上は・・・って、
オイ・・・まさか・・・」
「・・・僕も兄さんと同じ答えだよ。お互いがお互いの地名や文明知識なんかを全く知らない・・・
この事実を考えると、結論はそれしかない。」
「・・・『平行世界』・・・ま〜〜、実際『この目で観測してしまった』んだから、
科学者としては事実を受け入れるしかないよな。」

そんな話を続ける４人の前に、文字通り空の彼方から『何か』が飛んで来た。
「あっ、ここに居たんですか、霊夢さん！ニュースニュース、大ニュースですよ！
魔理沙さんが誰かにやられたそうですよ！魔力を根こそぎ奪われて倒れたそうですよ！」

「霊夢さん、この人は？」
「ああ、これは射命丸文、傍迷惑な『自称』新聞記者よ。」
「傍迷惑なのは、霊夢さんも人の事は言えないんじゃないですか〜？
・・・あれ？そっちは見かけない顔ですね。」
「ああ・・・何か外の世界から迷い込んで来たみたい。」

「えっ？！そうなんですか？またまた大スクープですね～～～！！」
そう言って３人の写真を撮る文。
「『霧雨魔理沙、謎の襲撃事件』の次は『外の世界からの迷い人』ですか～？
これは大事件の匂いがしますね～～～！！
この分だと、探せばまだまだ特ダネが沢山出て来そうですね～！！
それじゃ、私は引き続き取材に行きますんで、これで！！」
文のマシンガントークに完全に気圧され、飛び去って行く文を呆然と見送る３人。

「飛んで・・・行きましたね・・・」
「アル・・・俺もう『なんだありゃ』って言うのも疲れてきた・・・」
「何が起きても今更驚けない俺って・・・不幸だ～～～～～！！！」
「・・・あなたたちの事と言い、魔理沙の事といい、これはひょっとして
またまた『異変』なのかしら？！だったら、またまた私の出番、って事ね！！」

# 第三話　「私の願いは」

第三話　「私の願いは」

「―やぁまどか、魔法少女になる決心はついたかい？！」
「……キュウべぇ……まだ、マミさんみたいに戦えるかどうかも解らないし……
本当に決心が出来ているかも解らないけど……なるよ、私……魔法少女に。」
「じゃあ、まどかの叶えたい願い事を聞かせてよ！！」
「願い事？！……ああ、そうだね……折角だし……私は……私の願いは――」

---

「な～、初春～～～、ここ、何処だと思う～～～？」
「そ、そんなの解る訳ないですよ、佐天さん、いきなり暗闇に包まれたと思ったら……この有様なんですから……」
――初春と佐天の２人の少女は先程まで、学園都市でショッピングがてらにブラブラしていた……はずだった。
しかし、今は周囲の景色はとてもこの世の物とは思えない……一種の禍々しさと悪趣味さが混ざり合った異様な世界の中に居た。
「何だか変なのが沢山居ますよ……あれは動物……なんでしょうか？何だかすっごく気持ち悪いです！！」

2人の周囲を……あえて言うならば男爵髭の生えた綿毛の植物、ともいえる、何とも形容しがたい異様なモノが取り囲み始めていた。

「な……何だよ？！……か、噛み付かない……よな？！初春に何かしたら容赦しないからな！！」

佐天はたまたま（何）持っていた金属バットを振り回し、異様な怪物を威嚇するが、

怪物は威嚇に動じる気配もなく、じわじわと囲いの輪を狭めてくる……

「ど、どうしよう……（こ、怖い……でも、私はジャッジメントなんだから……

こんな時こそしっかりしないと！）」

佐天を心配させまいと悲鳴を上げるのを必死に我慢する初春……と、そのとき！！

ズダダダダダン！！

ヒュンヒュン！！

何処からともなく飛んできた無数の銃弾と矢が、

2人の周囲に群がっていた怪物たちを薙ぎ倒した！！

「間一髪……って所ね。」

「無事で良かった、もう大丈夫だよ！！」

「あ……あなたたちは？！」

「見て解んない？！……正義の味方の魔法少女に決まってるじゃん！！」

「ま……魔法……少女？！」

そうである…現れた３人の少女は…文字通り美少女アニメに出てきそうな
『魔法少女』そのまんまの格好をしていた。コスプレか何かではない。
そう、彼女たちは本当に魔法を使える『本物の魔法少女』なのだった…

「みんなにはナイショだよ……」
「まぁ……言いふらされても……きっと誰も信じないだろうけどねっ！！」
「突然の事でビックリしてると思うけど、落ち着いて聞いてね。
ここは魔女の結界の中……と言われても解らないわよね……
とにかく、とても危険な場所なの……私達の傍を離れないでね、でないと、命の保障はできないわ。」

「い、命の保障は無い？！そんな？！……只事じゃないですね……」
「心配するな、初春は私が守る！！」
再び金属バットをブンブン振り回す佐天。
「だ、大丈夫ですよ、佐天さん！！私だってジャッジメントの一員なんです！！
…あの…今持ってる武器らしい武器と言えば、スタンガンぐらいですけど……
これじゃ駄目……ですか？」

「金属バットにスタンガンか……フフッ、勇敢ね、
でも、魔女は普通の人間が敵う相手じゃないの。」
「魔女……なんて居るんですか？あと、こう見えて

一応能力者なんですけどね……レベル1ですけど……」
「まぁ仕方ないけど……私はレベル0だから『普通の人間』だよな……」

「レベル1？　レベル0？……RPGとは違うのよ？
……でも、折角勇気を出してくれたんだから、その気持ちは無駄にはできないわね。」
そう言って金属バットとスタンガンに触れると、金属バットは魔法のメイスに、
スタンガンは古いSF作品に出てきそうな光線銃に変化した！

「気休めだけど、何も持ってないよりマシな筈よ、イザという時はそれで身を守って。
……でも、絶対に無理はしないでね。」
「こ、これどうやったんですか？！凄い能力ですね！！」
「『凄い能力』？！……面白い言い回しね、私は魔法少女なんだから、
『凄い魔法ね』って褒めてくれたほうが嬉しいかな。
じゃあ、行きましょうか、鹿目さん、美樹さん！！」
「はい！！マミさん！！」
「速攻でサクッとやっちゃおーっ！！」

そう言って、青い服の魔法少女、美樹さやかは先陣を切って駆け出す。
そして、光と共に彼女の右手に1本のサーベルが顕現化した。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁっ、たぁっ！！たぁっ！！」
行く手を塞ぐ魔女の手下たちを、さやかが剣で薙ぎ払う！

ズダン！！ズダン！！ズダン！！

突進するさやかを援護するように、マスケット銃を片手に魔女の手下を撃ち倒して行く黄色い服の魔法少女、巴マミ。
彼女はマスケット銃を矢継ぎ早に持ち替えつつ、銃撃を続けて行く。
撃ち終えたマスケット銃は惜しげもなく投げ捨てているのだが、魔法の力でそれを上回る速度で弾丸の込められたマスケット銃を次々顕現化し、補充しているのである。
マミの銃撃は途切れる事は無かった。
それどころか、マシンガンもかくやと言わんばかりの弾幕である。

ズダダダダダン！！

「鹿目さん、右っ！！」
「はいっ！！」

ヒュンヒュン！！

マミの声に応えたのは、弓を構えたピンクの服の魔法少女、鹿目まどか。
彼女の弓から放たれた矢は光の矢となって、正確に魔女の手下たちを貫いていく。

「このっ！このっ！！初春に近づくなっ！！」
ボカッ、ズガッ！！
「ええ〜〜いっ！！」
シュビビビビッ！！
微力ながらも、初春、佐天の２人も魔女の手下の排除に貢献していた。

そして・・・5人が暫く行くと、ドアに行き当たった。
「魔女はこの奥かしら?!」
ドアを開けると、既に魔女らしき怪物と対峙している2人の人影が居た。
一人は赤い服を着て髪をツインテールに纏めた少女。
もう一人は赤い軽鎧を身に纏った短髪でやや浅黒い肌の男だった。
「何なんですあれ?!・・・あれが魔女・・・なんですか?あんなのと戦うんですか?!」
「何かイメージと違うな～～～、魔女って言ったら、箒に跨って、三角帽子を被ってて、鼻の尖ったおばあさんで・・・」
「佐天さん、何時の時代の人なんです?!」

「クッ・・・何なのコイツ?!」
「さぁな、ここの空間も異様だ・・・敵のサーバントの能力かもな。」
魔女の蔓が少女の方に襲い掛かる、少女は飛び退いて避ける!!
「このっ!・・・ガンドッ!!」
少女の指先から放たれた魔法弾がヒットするが、あまり効いているように見えない。
「・・・厄介そうな相手ね・・・」
「油断するな、凛。」
「判ってるわよ、アンタもね、アーチャー。」

「あれ?!・・・もう誰か魔女と戦ってるよ?!・・・他の魔法少女かな・・・」
「一人は魔法少女のようにも見えるけど、もう一人は男だよ?!・・・
男で魔法少女・・・ってのもおかしいんじゃない?」
「・・・1番乗りはあの2人なんだし、加勢するにしても一声掛け

てからの方が
後々喧嘩にならなくていいわね。」
佐天の持っていた魔法のメイスを地面に突き刺し、防御結界を作り出すマミ。
「危ないから、あなたたち2人はここでじっとしてて。」
「わ、解りました！！」
「・・・そこのお二人さん！！助けが要るなら加勢するわよ、グリーフシードは山分けでいいわよね？」

「・・・えっ？！（・・・って、何あの格好・・・コスプレ？！）」
「どうする？！・・・敵の罠かもしれないぞ？」
「あの格好で・・・罠ぁ？！・・・ナイナイ・・・」
オーバーアクションで手をパタパタ振るリン。
「まぁいいわ・・・良く判らないけど、手を貸してくれるなら助かるわ！！」

「オッケー任せて〜〜〜。鹿目さんと美樹さんは魔法少女としては今日が初陣なんだから、くれぐれも気を付けてね！」
「だいじょーぶ、だいじょーぶ！！ピンチになったら、マミさんが助けてくれるでしょ？！なら安心じゃん！！」
「もちろんそのつもりだけど、あんまりアテにし過ぎるのも良くないわよ？
私にだって、助けられない時もあるかもしれないんだし。」
「解ってるって・・・じゃあ、私が突っ込んで隙を作るから、まどか、マミさん・・・援護よろしく！！」
「頑張って、さやかちゃん！！」

「た〜〜〜っ！！」
ズバッ！！ズバッ！！

気合の声と共に蔓を切り払いながら突進し、魔女に斬りかかるさやか、
その後ろからまどかとマミが弓矢と銃で追い討ちを掛ける。
しかし、さやかの一瞬の隙を突いて魔女が蔓でさやかを絡め取った！！
「・・・しまった！！」
「さやかちゃん！！」
しかし、さやかを絡め取っていた蔓を正確にアーチャーが射抜いた。
「・・・凄い弓の腕前！！・・・私ももっと上達しなきゃ・・・」
「なんだ・・・加勢すると言っててそのザマか。邪魔しに来たのなら帰っていいぞ。」
「しょーがないじゃないっ、マミさんはともかく、私とまどかは今日が初陣なんだからっ！」
「何だその理屈は・・・素人が半端な覚悟で戦場に立つな・・・死ぬぞ・・・」
「うっ・・・何よそれ！！私だって・・・覚悟ぐらい・・・」
「残念だけど、彼の言っている事も一理あるわ、前も言ったけど、危ないことしてる、ってのだけは覚えておいてね？」
「まったく、アンタは誰に対しても容赦ないわね、アーチャー・・・今は全員生き残る事を最優先に考えましょう？アーチャー。」
「そっちが構わないなら私が決めるわ。あいつに隙を作るのを手伝ってくれると嬉しいんだけど。」
「奴に関してはあんたが一番実戦慣れしてそうだな、いいだろう、5人掛りで集中攻撃だ、
おいあんた、４人掛りで援護するんだ、次は上手くやれよ？」
「あんたじゃないっ！！美樹さやかっ！！」
「口だけは一人前だな」
さやかはアーチャーを睨むが、それ以上口論するのは止め、代わりに怒りの矛先を魔女に向ける。
「そもそも、魔女なんか居るのが悪いんじゃないっ！！居なくなっ

ちゃえ〜〜っ！！」
さやかの突進を後押しするように、銃弾の、魔力弾の、矢の雨が魔女に襲い掛かる！！
「た〜〜りゃ〜〜っ！！」
ズバァッ！！！
さやかの一撃で魔女の巨体が大きく揺らいだ！
「美樹さん、下がって！！」
そう言ってマミは、自分の体の数倍はあろうかと言う、巨大なフリントロック銃を顕現化させた！
「・・・ティロ・フィナーレッ！！！！」
ヅドガ〜〜〜〜ン！！！！！！！
マミの必殺の一撃で魔女は粉砕され、周りの景色は異様な空間から一転して、
普通の街の景色へと変わった。

「ごめんなさいね、何だか迷惑掛けちゃったみたいで。」
「えっ？！・・・ああ、アーチャーはいつも「ああ」だから。正直、私とアーチャーの２人だけで
倒せたかと聞かれれば自信が無いわ。だからありがとう、私は凛、遠坂凛よ。」
「私はマミ、巴マミよ、ところで遠坂さんも・・・魔法少女・・・なの？
見た所、変身しているようには見えないんだけど。」
「魔法・・・少女？！・・・変身？！・・・あ〜〜〜、「完全になり切ってる」訳ね。ゴメン、あなたたちの感性だと、そう名乗るのが普通なんだろうけど、生憎私はそんな趣味はないから。そうね、名乗るとしたら『魔術師』ね！」
「『魔術師』か〜〜、それもかっこいい響きだけど、私は魔法少女の方が可愛いと思うな〜〜。」
「そうね、でも、変身せずに魔法が使える魔法少女が居るなんて・・

・

キュウべぇからは聞いてないわ。」

「・・・解った、解った、もういいから。」

「そんなにヘンかな?!『魔法少女』って・・・」

「個人的な趣味をどうこういうつもりは無いけど…

私なら『そんな格好で戦うのは絶対に嫌』ね。ところで…」

凛は周囲の景色を一通り見回し…

「…ココは何処なのかしら?」

# 第四話　「新たなる敵、更なる出会い」

第四話　「新たなる敵、更なる出会い」

昨日のネウロイの襲撃で少しごたごたがあったものの、街はいつもの静けさを取り戻していた。
そんな中、ストライクウィッチーズの５人は高町家でご厄介になっていた。
流石になのはとしても放ってはおけず、かといってどこかに預けるにも状況が状況なので、結局自分の家に連れてくるハメになってしまった。
……ちょっとごまかすのに苦労したのは言うまでもないが。
家族の了解も得られ、５人は道場を仮の住まいとして、坂本は高町家の手伝いをしながらこの世界の情報を仕入れていった。主にレイジングハートと新聞や教科書などからであるが。
芳佳、リーネは坂本同様せめて何か手伝える事をと思い、少々なのはの家の手伝いをしている。
シャーリーは全員の装備一式を一通りメンテナンスしていた、いきなり空中でエンストなぞ起こしたら洒落にならないからだ。
ちなみにルッキーニは………いつもどーり遊んでいた。漫画とアニメとゲームが気に入ったようである。

「それで、だ。今までの情報を整理しよう」

最初にそう切り出す坂本。その日、昼飯を終え一同はなのはの部屋に集まり今までに得た情報を整理しあっていた。しかし………

「やったー！！リオレウス撃破ー！！見た見た？十発十中だよ！」
「ルッキーニちゃん、それ言うなら百発百中じゃあ……」

2人でモンハンやっているルッキーニとなのは。ちなみに2人ともガンナーである。

「くうぅ！！このバイクいいなぁ！！どんなエンジン積んでんだ！？てか、運転できたら最高なんだろうなぁ………」

一通り終わったため家に何となく置いてあったモータースポーツ系の雑誌を見てうっとりしているシャーリー。

「わぁ、このお菓子おいしー。これって桃子さんのお手製だよね？」
「うん、凄いよねー、お茶の入れ方もうまいんだよ。いろいろ教えてもらっちゃった♪」

なのはの母親、桃子さんお手製のお菓子を食べながら談笑する芳佳とリーネ。
みんな、この世界に馴染んでいた。と言うか馴染みすぎである。1日くらいなのに。

「お前達、状況理解してるか？」

そんな一同にジト目で訴える坂本であった。

「あ、坂本さんも食べます？お菓子」

「ああ、頂こう……。
………そうじゃなくてだな。とにかく、これを見ろ」

そう言い、２枚の紙を出す坂本。
２枚とも世界地図のようである。ただ、それぞれ微妙に差違があった。
「世界地図だよな？あれ？何かおかしくないか？」
「ああ、一方は偶然にもルッキーニが持ち合わせてた我々の世界の世界地図だ」
「秘密基地に飾るつもりだったのに～」
「で、もう一方は、この世界の世界地図だ」
「なんだって？！」
「形が微妙に違いますね……あと国名とかも」
「ああ、最初は信じられずにいたが、ここまで来ると信じずにはいられないだろう。
高町の言っていた「次元世界」というモノを」
「そうだよなー。そもそも科学技術レベルからして違いすぎる。ルッキーニが持ってるゲーム機しかり、この雑誌に載ってるバイクしかり」
「ああ、そうだな、技術の進歩とは凄いモノだ。
そういえば、高町の言っていた、その「時空管理局」という所には連絡はしているのか？」
「はい、昨日のうちに。向こうも今回の件は既に察知していて、急行すると言っていました。」
「それは助かる。正直、我々だけでは手に余る事態だからな。」
「そういえば、あのネウロイって何なんですか？
坂本さんたちは、ずっと『あれ』と戦ってきたんですよね？」
「残念だが、我々も詳しい事が分かっている訳ではない。分かっているのは、瘴気を撒き散らしながらあらゆるものを腐食し、浸食し、

増殖し続ける、明らかに人類に対して敵意を持つ『存在』である、と言う事だけだ。幸いなのは、ネウロイは特定の場合を除き単独で出現することが多い、と言う事だ。それに奴らは水が苦手でな。海などを潜って渡ってはこない。来るとすれば……」

「空から、ですね」

「そういうことだ」

「んー、何か難しい話ばっかだなーっと。ジュース、ジュースはないかなぁ～」

そう言って一旦部屋より出てリビングに向かうルッキーニ。

その時、リビングのテレビの画面が唐突に臨時ニュースに変わった。

『番組の途中ですが、ここで臨時ニュースをお伝えします、海鳴市の上空に、またしても謎の黒い物体が出現しました、この物体は………』

「にゃあ～～～～！！」

ルッキーニはその放送を聞いた瞬間。一直線に部屋に戻った。

「大変！！またネウロイが出たって！！」

「なんだと！？」

その言葉に驚きの声を上げる5人。

「坂本さん！」

「ああ、直ぐに出撃だ！

………静かに秘密裏にゆっくりとな。士郎どの達には内緒に」

最初の日に魔法に関しては秘密裏にと言う釘を刺されていたので、みんな静かに道場の方に移動する。
そこで物置に入れてあったストライカーユニットを換装する。
しかしそこでふと厄介な点が判明する。

「まずいな、このまま発進すると発進音で周りに気づかれる。それに滑走路がないから発進に魔法力を少々多く消費することになるな」

「あーそうだったなあ。どうする？」

そう言って悩む一同になのはが提案をする。

「それに関してですけど、私に考えがあるんだけど……」
「ん？どうするんだ？」
「私が上空まで皆さんを撃ち出しますんでその勢いで発進してください、上空なら多少の音でも大丈夫なはずですから」

そう言って魔法陣を目の前に展開するなのは。それをカタパルトの要領で撃ち出すようだ。

「なるほど、了解した」

そう言いその魔法陣の上に立つ坂本。
そして……

「いきますよ！」
「よし、発進！！」

全員が上空へ舞い上がり、スピードを上げて現場へ向かう一同。
「坂本さん！！急ぎましょう！！」
「そうだな……街に被害が出る前に……ん？！」
そう言いかけた坂本だが、猛スピードで「何か」が迫って来るのに気付いた。

「ッッ！！」

ガッキィ〜〜〜ン！！！
突然剣を振りかざし襲い掛かってきた女性の一太刀を、辛うじて烈風丸で受け止める坂本。

「くぅ！！……貴様、何者だ！！命を狙われる覚えなど、私には無いぞ！！」

襲撃してきた女性に問いかける坂本。

「だれなの？！」
「なに？高町、お前の知り合いではないのか？」
「はい、私の知り合いじゃないです……」

襲撃した女性を見ながら応えるなのは。
赤い髪と青い瞳の長身、手には片刃の長剣を、腰にはそれを納める鞘が見える。
赤い剣士鎧に身を包み、その姿から炎の気質も伺えた。
そして何より……

（うわぁ、おっきぃ……）
（シャーリーと同じくらいおっきいかも～）

と、緊急時なのにこんな事考える芳佳とルッキーニの感想のように胸がでかかった。
襲撃してきた女性は、剣を構え、６人を見据え、こう言い放つ。
「命まで奪うつもりはない。私が欲しいのはお前たちの『魔力』……」

そう言い、宮藤となのはを指差し、
「特にお前とお前……非常に高い『魔力』を持っているようだな……」

「…何のつもりかは知らないが、私達にはお前に付き合っている暇はない、退いてもらおうか。」
「………断る。」

ガキィィン！！ガキィィン！！
斬りかかってくる女性の太刀を烈風丸で受ける坂本。
「止めろ！！ここで人間同士で争っている場合か！！ネウロイが迫っているのだぞ？！」
「邪魔だてするなら、全てを切り奪うまでのことだ」

ガキィィン！！ガキィィン！！

「クッ、聞く耳持たず……か！！……宮藤、リーネ、シャーリー、ルッキーニ、お前たちは先に行け！　ここは私が食い止める！」

坂本は後ろにいる４人に命令した。
だが４人もここに一人坂本を残していく訳にはいかないと思った。

「……でも！！坂本さん！！」
「ネウロイの攻撃圏内に街が入るまであまり時間が無い！！街に被害が出てからでは遅いだろう？！」

その言葉に４人は一応ながら納得する。

「……わ、解りました！！坂本さん、気を付けて！！」
「ああ、任せろ。高町、お前もだ。ここは私一人で十分だ。」
「一人で大丈夫なんですか？！私が残った方が……」
「いや、それは駄目だ、高町、お前のの火力は対ネウロイ戦において重要だ。弾数が残り少ない我々とは違って弾数に制限はないお前はネウロイ戦で戦力になる。私なら大丈夫だ、不利だと感じれば最悪あいつを振り切って逃げれば済む事だ！！」

そう言われ、なのはも納得したのか、離脱することにした。

「じゃあ、お願いします！！気を付けてください！！」
「ああ、任せろ！」

坂本一人を残し、飛び去っていく残りのメンバー。

「……！！逃がすか！！」

それを追撃しようとする女性にそうはさせまいと坂本が行く手を阻む。

「安心しろ、お前の相手は私がしてやる……あの子たちの邪魔はさせん！！」

――――そのころ、ネウロイが居る空域では――――

「まったく、何なんですの？！コレ？！」

複数の小型円盤ネウロイに囲まれ、逃げ惑う一団が居た。

「さぁ……模擬戦用のデコイのようにも見えるけど……
それよりも、ここが何処なのかも問題だよ！！」

そう言いながら逃げる1団、しかしその行く手を阻むように迫るネウロイ。

しかし突然横から飛んで来た銃弾が、小型ネウロイを薙ぎ払った。

「あなたたち、何をボーッっとしてるんですの？！
只飛んでいるだけでは、ネウロイにやられてしまいましてよ！！」

そう言い軽機関銃を構えるのは金糸を思わせる長い金髪と瞳の少女である。

足には坂本達と同じストライカーユニットを装着していた。

「えっ？！」

「それにしても、ゴテゴテしたストライカーユニットですわね……
何処の国のウィッチですの？」

「え～～っと……君は？！」

「……えらくシンプルなＩＳですわね、その銃火器も随分と旧式に見えますし

……もしかして、第一世代型ですの？」

「旧式って何ですの？！旧式って！！失礼ではなくてっ？！」

……セシリア、誰もが君や僕のような専用機持ちじゃないんだし

「セシリアが気を悪くするような事を言ってゴメン！！」

「一夏……も、申し訳ありませんわ、え～と……」

「……ペリーヌ・クロステルマンですわ！！」

「……えっと、とりあえず、こっちも名乗らなきゃな。俺は織斑一夏。」

「セシリア・オルコットですわ。」

「凰鈴音（ファンリンイン）だよ！」

「私はシャルロット・デュノア」

「……ラウラ・ボーデヴィッヒ」

「……篠ノ之箒だ……一体何がどうなってるんだ？」

「とりあえず、詳しい自己紹介はこいつらを何とかしてからにしない？

……人間が乗っていないなら、こっちも遠慮する事なんてないよ。」

「……そうだな、シャル、模擬戦のつもりでいいんだ……やろう、みんな！！」

「解った……一夏がそう言うなら……」

「ブルーティアーズの力、見せて差し上げますわ！！」

そう言い、真っ先に行動を始めたのは金髪の長い髪をもつセシリア。彼女の操るＩＳは『ブルーティアーズ』、長距離射撃戦を得意とするＩＳである。

主な武装は大型レーザーライフル『スターライトｍｋＩＩＩ』と遠隔操作が可能な攻撃型ビット『ブルーティアーズ』。

シュンシュンシュン！！

その機体名の由来でもあるビット、『ブルーティアーズ』を展開し、ネウロイを次々と撃破していく！！

「セシリアだけにいいカッコはさせないんだから！！」

栗色の髪をツインテールで纏めた少女・鈴音、
彼女の操るＩＳは『甲龍（シェンロン）』、近～中距離戦闘を得意とするＩＳである。
大型の青龍刀『双天牙月』２本と、空間圧縮型衝撃波砲『龍咆（りゅうほう）』を主武装とする。

ゴゥン！！

甲龍の龍咆が唸り、ネウロイを纏めて吹き飛ばす！！

「何だ…弱いな…これじゃあ、倒しても一夏に褒めて貰えないじゃないか。」

「す、凄いですわ！！何なんですの、そのストライカーユニット！！
…確かにそんな凄いストライカーユニットを装備しているなら、
『旧式』呼ばわりされても仕方ありませんわね…」

「……なぁ……さっきから言ってる『ストライカーユニット』って何なんだ？」
「……ストライカーユニットを知らないのですの？！
……じゃあ、あなたたちの『それ』は一体何ですの？」
「ああ、これか？これはＩＳ、『インフィニット・ストラトス』と言って

……え～～と……詳しい説明はパス。」
「……一夏……相変わらずだね……」

そんな一夏たちの元に、なのはたちが現れた。

「リーネちゃん、あそこに誰か居るよ？」
「あれは……ペリーヌさん？！」
「……ホントだ。お～～い、ペリーヌ～～～～！！」
「……？！宮藤さん？リーネさん？シャーリーさん？ルッキーニさんも？」
「ペリーヌさんも、この世界に飛ばされてたんですね？」
「……？どういう事ですの？」
「詳しい説明は後でするよ……それよりも、ネウロイを何とかしないと。」
「そうですわね……小物はあらかた片付けたのですが……大物が残っていますわ。」

見ると、巨大なマンタレイを思わせる大型ネウロイがこっちに迫ってきていた。
口に当たる大きな開口部から、次々に小型円盤ネウロイを発進させながら。

「見て！！あの口からどんどん小型のネウロイ出てきているよ！！」
「なるほど…さながら空中空母と言った所ですわね…」
「つまり…あいつを倒さない限り、こいつらは幾らやっつけてもキリがない、と言う訳か…」
「こうなったらとことんやってやる！！行こう、みんな！！」

大型ネウロイを撃破せんと攻撃を掛ける一行、

そうはさせまいと襲い掛かって来る小型円盤ネウロイ！

「露払いは任せて！！」

ズダダダダッ！！ズダダダダッ！！ドガガガ〜〜ン！！

髪の短い金髪の少女・シャルロット、
彼女の操るＩＳは『ラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩ』、
爆発力は無いが、豊富な武器搭載力と武装を瞬時に持ち替える
『高速切替（ラピッド・スイッチ）』システムによって、
非常に優れた汎用性を発揮するバランスの取れたＩＳである。

「この！！」

ドシュバシュバ〜〜！！
アサルトライフルを持っていたと思ったら次はミサイルランチャー、
そうかと思ったら今はアサルトカノンを持っている。

物量をものともしない圧倒的手数で小型ネウロイを次々撃墜していく。

「チッ、光学兵器が相手では折角のＡＩＣも役に立たんか…」

襲い来るレーザーの雨を避けながら、銀髪・眼帯の少女・ラウラがぼやく。
彼女の操るＩＳは「シュヴァルツェア・レーゲン（黒い雨）」、
彼女のＩＳはアクティブ・イナーシャル・キャンセラー（慣性停止結界）、
つまり慣性を任意に停止させる装置を装備している。
１対１では反則的な効果を発揮するが、対象に対して集中していな

いといけない、
複数相手やエネルギー兵器には効果が薄いなど欠点も多い。
主な武装は右肩の大型レールカノンとワイヤーブレード、両腕のプラズマ手刀。

「だが遅れを取るつもりはない！！」

ドコォ！！！

ラウラのレールカノンが大型ネウロイの巨体を穿った！！
しかし、損壊箇所はみるみる再生していく。

「なんだこいつ…再生するのか？」
「ネウロイはコアを破壊しない限り幾らでも再生します、コアを探してください！！」
「これは厄介な相手ですわね…でも、それだけに倒し甲斐がありますわ！！」

「行くよ、ルッキーニ！！」
「オッケ〜〜、私達もいいとこ見せないとね〜〜、ヒャッホ〜〜〜！！」

ズダダダダッ！！ズダダダダダッ！！

「これ以上、私の街には近づけさせないの！！ディバインシューター！！」

ビシュシュシュシュ〜〜ッ！！

一行の四方八方からの波状攻撃で、ネウロイは文字通り蜂の巣にさ

れていく！！
そして…剥がれた皮膜の下に紅く光る結晶…ネウロイのコアが露出した。

「見えた！！ネウロイのコア！！」
「あそこが弱点か、とどめは俺が！！」

世界でただ一人の男性のＩＳ適合者、一夏。
彼の操るＩＳは『白式（びゃくしき）』、超近接戦闘特化・一撃必殺型のＩＳである。
武器は雪片弐型（ゆきひらにがた）のみ、
この刀剣型の武器は破壊力は絶大だがその分エネルギーの消費も凄まじい諸刃の剣である。

「うぉぉぉぉぉ～～～！！」

白式の単一仕様能力、零落白夜を発動させてネウロイのコアに突進する一夏！！

「…あれ？」

しかし、目前でエネルギー切れとなり、装備が解けてしまう一夏。
ＩＳはエネルギーが尽きると量子格納させて待機状態となってしまうのである。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そのまま海へと真っ逆さまに落ちて行く一夏、
しかし、海面すれすれのところで箒が受け止めた。
彼女の操るＩＳは『打鉄（うちがね）』、他の５人と違って、彼女のＩＳは量産

型である。
専用機のような突出した能力は無いが、初心者でも扱いやすいＩＳである。
ＩＳが装備可能な基本兵装ならだいたいの物は装備できるが、箒は日本刀型の実体剣を愛用している。

「何をやっているんだ、一夏…もう少しエネルギーの使用配分に気を使えといつも言われてるだろう？」
「あははは…ごめん。」
「あははは…って…他人事のように！！下が水でもあの高度から落ちれば只では済まないぞ？！」
「遊んでる場合じゃないよ、二人とも！！」

「宮藤、ルッキーニ、ペリーヌ、もう一度コアを露出させるぞ。」
「解りましたわ！」
「いっくよ〜〜〜〜！！！」

ズダダダダダッ！！ズダダダダダッ！！

シャーリーの合図で４人が編隊を組んで、コアを覆う皮膜に集中砲火を掛ける、
４人の攻撃で、ネウロイのコアが再び露出した！！

「えい！！！」

ズドン！！！！

リーネの狙いを澄ました対戦車ライフルの一撃が、ネウロイのコアを貫いた。
コアを失ったネウロイは崩壊し白い破片となって霧散した。

「やった～～～～！！！」

「…そうだ、坂本さん！！」
「早く戻らないと！！」
「あいつ、かなり強そうだったからな～～～」

「すみません…詳しい説明は後でしますんで…私達に付いて来てくれませんか。」

「え…ええ、構いませんわ。他に行くアテもありませんし…異議はありませんわよね？」
セシリアの言葉に首を縦に振って応える一夏たち。

かくして、一夏たちはなのはたちと行動を共にすることとなった…

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2241s/

超空想魔法科学大戦

2011年4月11日06時08分発行